



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	アイヌ語否定表現の語用論的研究：口承文芸テキストを中心に〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	Nurmi, Jussi Henri Sebastian
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第16491号
Issue Date	2025-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94953
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Jussi_Nurmi_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）氏名：ヌルミ ユッシ ヘンリ セバスティアン

主査 教授 佐藤 知己
審査委員 副査 教授 加藤 重広
副査 准教授 丹菊 逸治

学位論文題名

アイヌ語否定表現の語用論的研究 ―口承文芸テキストを中心に―

・当該研究領域における本論文の研究成果

本研究は、アイヌ語の否定の語用論およびアイヌの散文説話に現れる否定発話の機能と意味を解明する試みである。アイヌ語に関する語用論的研究そのものが非常に少なく、これまでの研究の多くは記述的アプローチや文法・語彙構造の説明に重点が置かれてきた。そのため、語用論や談話に注目した研究を進めることが重要であるが、本研究は「否定」に焦点を当て、この分野の進展を志したものである。否定を取り上げた理由は、否定表現が前述された肯定のコンテキスト（あるいはその前提）を必要とするという性質を持っており、本来的に語用論と深くかかわる性質を持っており、このテーマの研究上、有利であることによる。

まず、アイヌの散文説話を分析する中で、物語の冒頭で否定に相当する形式が現れ、肯定的なコンテキストが明示されていないにもかかわらず使用されるような例が多数あることに着目する。多くの例を分析しながら、アイヌ語において否定は主人公の未知の背景を強調し、聞き手にサスペンスを与えることが示される。そして、この種の効果をさまざまな側面から細かく考察している。

まず、否定表現は肯定の内容が前提として存在しているコンテキストで用いられることがあり、地と図の反転によって否定で表される新情報が強調される傾向が見られることが指摘された。このような場合は、否定表現が暗示否認として機能し、前提における肯定の命題を否認し、否定を通じて「正しい情報」が提供されることを論じている。また、詳細な描写という一種の追加説明や肯定的な意味合いを強調する目的で否定が用いられる場合もあり、特に主人公や登場人物の性質を描写する場面で用いられる事例の多いことが指摘された。さらに、否定表現が物語の中で誇張という修辞的手法としても使用されていることが観察されることも指摘している。主に以上の結果から、アイヌ語の

散文説話における否定表現は、物語の構造や登場人物の描写に深く関与していることが具体的に示されている。本論文でなされている否定表現の談話的機能に関する体系的な研究は、アイヌ語を対象としたものとしては現在までに多くはなされていないため、アイヌ語の文学テキストのみならず、アイヌ語そのものの意味論、語用論の研究を進展させ、アイヌ語の言語表現そのものの理解に貢献するものと言える。

語用論的な研究の難しさを考慮すると、「話者が少ない」といった点で当然、研究上不利な点があることは否めない。従って、当然、分析は慎重に行う必要があり、数多くの解釈の可能性を踏まえなければならない。しかし、本稿で分析に用いた資料は口承文芸資料であり、伝統的な言語生活のルールを反映しており、高い社会習慣性を示す可能性がある資料であり、その語用論的分析は、やはり、アイヌ語における否定発話の重要な特徴を明らかにする上で貴重な知見を提供するものといえる。

本研究の分析対象は、21 話の北海道沙流方言の物語に制限されており、そのうち約半数が同じ話者によるものである。そのため、否定表現の物語における使用傾向が話者の個人的な特徴に影響を受けている可能性は否定できない点があると言える。つまり、物語の内容が異なっている場合でも、同様の話者の場合は語り方や用いられた表現が類似する可能性が常にあるため、今後の研究では様々なインフォーマントが語った物語を分析対象として同様な研究を行い、さらなる比較検証を行う必要はあるであろう。しかしながら、分析した資料に関する限り、おおむね一致した結果が得られていることは重要と思われる。とくに「暗示否認」として捉えられる否定発話の分析の際に背景知識の種類にも注目しながら考察を行った上で、その否定発話がストーリーに対してどのように機能しているのかという点に特に注目して、注意深く論じられている点は重要である。その結果、資料の約 7 割の否定表現が「暗示否認」として捉えられることが示された。これにより、否認される命題が何らかの背景知識から生じていることが語用論的分析によって明らかにされ、否定が物語のストーリー展開上、有用な機能を果たしている可能性が実証的に指摘された。

なお、アイヌ語の否定の談話的機能を理論的、客観的に把握するためには、可能な分析手段や理論を用いる必要があり、できる限り多様な先行研究や理論を概観して研究の妥当性を強める必要がある。同種の先行研究が乏しい中、本研究では関連する語用論や談話研究上の一般理論に関して、できる限りの目配りがなされている。この点でも本論文は、アイヌ語における今後の同種の研究の基礎の役割を果たすものとなっている。

・学位授与に関する委員会の所見

多くの新たな知見が提示された優れた論文ではあるが、審査委員会においていくつかの問題点が指摘された。特に、アイヌ語諸方言内の地域差に関する考慮が不足している点、依拠している語用論関係の理論に若干の偏りがみられ、批判的検討がさらに必要な点があるのではないかという点を中心に試問が行われ、提出者がこれらの点の重要性を

十分に理解していることが確認され、これらの点は本論文の重要性を損なうものではなく、今後の更なる研究の展開によって十分克服できるものと判断された。

以上の評価を踏まえ、審査委員会として全員一致して、氏に博士（文学）の学位を授与するのが妥当であるとの結論に達した。